

社会教育コンテンツとしての奄美語継承活動とその方法の研究

前田 達朗（大阪産業大学 教養部 非常勤講師）

今回の研究は2012年度の「第七回児童教育実践のための研究助成」で助成をうけた「奄美方言の小学生向け映像教材の開発とその活用法についての研究」の成果と反省を受け研究計画をたてた。今回の研究でも映像コンテンツを作成することを一つの軸にするという事は変わらなかったが、その制作コンセプトと方法、地元協力者との関係は全く違ったものになった。この研究報告は「瀬戸内のシマグチ」を製作、発表してからの2年間の現地の人々への働きかけと反応とその上での「瀬戸内のシマグチ2」の構想と製作、コンテンツ製作の過程と新たに浮かび上がった問題点、完成後から現時点までの反応という構成になる。

前回研究の目的と映像教材の位置づけ

1980年代から始まったとされる奄美大島南部瀬戸内町での奄美語「シマグチ」の伝承活動であったが、ネイティブ世代が減少し、教えるための方法や手段が今後ますます厳しくなることへの一つの提案が、教材の作成と記録を両立させるための映像コンテンツだった。こうして2013年に完成した「瀬戸内のシマグチ」は時間数で120分の映像コンテンツと書き起こしのテキストができあがった。これが瀬戸内や奄美での言語継承にどれだけの意味があるのかはともかく、言語研究のためではない記録ができあがったという意味では初めての試みであると言えよう。これらコンテンツの使い方を考えること、あるいは考えてもらうことで、継承活動は新しいフェーズに入れるはずだと。この地域の言語継承のためにできることを探るといふ研究の目的は前回と今回では大きく変わっていない。しかし前回の「瀬戸内のシマグチ」への様々な反応が今回の研究のもう一つのモチーフであった。

地域の反応と本研究での対応

集落の名前をタイトルに冠したことで、なじみのない地域のプログラムは見られなかったため特定の地域と結びつかないコンテンツを作成する必要があった。また書き起こしテキストが大量になり映像が付属物と誤解されたため字幕を増やし映像だけで理解できるものを目指した。これらを受け手奄美の伝統歌謡である「シマウタ」を題材にしたコンテンツを作成した。また前回作成したコンテンツの内「教材」の色あいが強いものを再編集した。さらにDVDで配布することの限界が見られたため電子ブック型のデバイスを導入、個人や少人数での学習にも対応できネットやAV機器がない環境でも動画でコンテンツが見られるようにした。また古典主義的な規範主義が根強いが、若手のシマウタ演奏家を起用することで、シマグチが高齢者の専有物であるという意識に働きかけることは前作からかわっていない。

瀬戸内町の社会教育の状況と今後の課題

学校教育の中で積極的にシマグチを扱うことは難しい現状にかんがみ、集落共同体を主体とした社会教育の中に活路は見いだせないかというのが今回の研究のもう一つの課題であったが、集落ごとの活動の停滞、町行政の大きな変化の影響などで瀬戸内町全体の社会教育そのものが隘路にはまっている状況であった。この点については状況の好転を待つこと、そして個人的なアプローチをすることで本格的な研究を再開する時期を逃さないようにしたい。

以前の経験や時間の長さという意味での縮小で、制作の時間は短くできただけでなく今回の映像教材「瀬戸内のシマグチ2」は、新しいデバイスの導入もコンテンツと同様に「使う」場面では重要なファクターである。従ってこれがどのように受容されどういった効果を生むのかについてはコンテンツだけでは論じれないところがあり、今後時間をかけていろいろな層の人々に意見をもらい、その上で研究計画の到達点である「使用法までを含めた提案」にたどり着けるようにしたい。さらにはそれをマニュアル化できれば、前回の研究からの目的の一つであるネイティブ世代ではない人にもシマグチの導入の「送り手」となり得る可能性がある。

少数言語・危機言語の継承の方法は世界中で模索されている。決定的な方法や理論が見つかっていないというのが現状である。だからこそ色々な方法を試し、失敗も含めて積み上げていくことが必要だと考える。言い訳になるかも知れないが完成度を問うにはまだ少し早い。様々な方法を地域に提案し続けることでまた新たなアイデアも生まれるであろう。それが外部の研究者からでなく、地域社会、ここでは「シマ」から出てくるのが理想である。